

〈戦後日本〉の死と再生—  
大江健三郎『懐かしい年への手紙』論—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-08-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00063660">https://doi.org/10.24517/00063660</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 〈戦後日本〉の死と再生

## —大江健三郎『懐かしい年への手紙』論—

團野 光晴

### 1 はじめに — 作品の概要と先行研究の問題 —

一九八七年一〇月に講談社から刊行された大江健三郎の書き下ろし長編『懐かしい年への手紙』は、大江のノーベル賞受賞時にシエール・エスプマルキ文学賞選考委員長の演説で『万延元年のフットボール』(『群像』一九六七年一〜七月号、同年九月講談社刊)に次いで多く言及され、大江の代表作と目される。大江が自身現実作家として生きてきた戦後の日本を、ギー兄さんという虚構の人物を介して振り返り、地獄から煉獄での罪の浄化を経て救済へ至るダンテの『神曲』を手引きとして総括した作品と言えよう。

話は先の戦争末期に遡る。四国の谷間の村の十歳の少年「僕」(Kという名で、明らかに大江がモデル)が、旧制中学を休学中だった五歳年上のギー兄さんの勉強相手選ばれる。ギー兄さんは村の創建者を先祖とする当地最大の山林地主の家の息子で、村では半ば人格化されており、「僕」は彼を自分の師匠と仰ぐようになる。敗戦後、新制中学・高校を経て浪人した「僕」は、東大英文科を卒業し

は放浪の旅の途中で東京の「僕」の家を訪れ「回心」について語り、村に帰って「根拠地運動」の再開を議論むが失敗、頑なになって自分の土地の窪地「テン窪」を人造湖化し、島と浮かぶテン窪大楢の塚を「神曲」の煉獄山に見立て鑑賞しようと堰堤工事を始めるが、工事に反対する下流域の住民に殺され人造湖の水面に浮かぶ。その遺体をオセツチャンと「僕」の妹・アサがボートでテン窪大楢の島の岸に運び、青草を摘みながら警察の到着を待つ。この光景を「僕」は『神曲』の煉獄の岸辺の場面に重ね、ギー兄さんと「僕」、オセツチャンとアサ、「僕」の妻オユーサンと息子ヒカリがそこで永遠に幸せに過ごす様を想像してこれを「懐かしい年」と名付け、それに向け幾度も手紙を書くことをギー兄さんに誓うところで大団円となる。さて本作品の先行研究は、大団円の「懐かしい年」を(魂の救済)と見なしつつ、これをどう評価するかをめぐって展開してきたと言える。まず中村泰行「大江健三郎『懐かしい年への手紙』論——「回心」の意味を中心に——」(『民主文学』一九八八年四月号)は、本作品において、『神曲』「地獄篇」冒頭のダンテ及び同第二六歌のユリシーズの挫折した自力救済の試みが「失敗した回心」としてギー兄さんの「根拠地運動」及びKの「強権に確執を醸す志」の文学に、ウェルギリウスの先導で地獄・煉獄をめぐる天国に至るダンテの道行きが神の摂理や恩寵に導かれた「成功した回心」としてギー兄さんの煉獄を模した人造湖造成及びKの「懐かしい年」に重ねられており、「ギーとKを通して描かれているのは『神曲』における「失敗した回心」から「成功した回心」への移行である。だがその移行の内実は「村改革」や「政治との接触」の拒絶、すなわち現実改革の断念に立

て村に戻ったギー兄さんに彼の屋敷で受験勉強の指導を受けるが、屋敷には一度結婚して屋敷を出た家政婦のセイさんが離婚して娘のオセツチャンとともに戻ってきており、戦後の混乱期以来続くギー兄さんとセイさんとの男女関係に東京からやってきたギー兄さんの元恋人とその女友達が絡む複雑な関係が渦巻き、「僕」もここに巻き込まれたりする。この頃からギー兄さんは『神曲』を精読しており、「僕」もその感化を受ける。その後東大に進み作家になった「僕」の妻・オユーサンを氣遣って六〇年安保の際上京したギー兄さんは、デモに巻き込まれ右翼の襲撃に遭って重傷を負うが、介抱してくれた女優の繁さんと恋に落ち、彼女とともに村へ帰って政府の「所得倍增計画」に対抗する農村振興運動「根拠地運動」を起こす。だがギー兄さんは運動から抜けようとした繁さんを暴行して死なせ、盛り上がりつつあった運動は瓦解する。服役当初「僕」とダンテ関係書を作りとりしていたギー兄さんは、一旦「僕」と関係を断つた後、刑期を終えて故郷の屋敷に戻り「僕」と交流を再開、一方でオセツチャンと結婚し、これを機にセイさんは大阪へ去る。その後ギー兄さん

脚する、「主観が見る幻」としての「魂の救済」への帰依である」としてこれを「思想的・政治的転向の意味の「回心」ではないか」と評し、そこに「懐かしい年」執筆にあてられた八年間」の「戦後第二の反動攻勢期」としての時代相と大江の「本質的ともいうべき後退的屈折」を見た。これに対し菅野昭正は「根拠地の思想——大江健三郎『懐かしい年への手紙』をめぐる」(『群像』一九八八年二月号)でこの大団円について「現実的な「根拠地」だけに固執して、眼に見えないもの、形而下から遠く離れたものまでとどかない視線にとつては、これは一場の白日夢にしか見えないかもしれない」が、「大楢の島」の幻視をめぐる散文の力」に「うながされるようにして、死と再生の場が開かれるこの超越的な新しい「根拠地」へ呼びかける行為は、現実的な「根拠地」に賭ける夢の彼方で、現われるべくして現われたもうひとつの夢を構成する」と述べた。

この後の本作品評は、方法論や訓詁註釈的なものを除き、専ら菅野論を引き継ぐ形で大団円における(魂の救済)に積極的意義を見出そうとしてきた。榎本正樹はこの大団円を「ギー兄さんが計画を立てつづけに頓挫してしまった現実生活での(懐かしさのトポス)のモデルづくりを、想像力で奪還する試み」として柄谷行人(「固有名をめぐって2」同一性の回帰——大江健三郎)『海燕』一九八八年四月号)の言葉を借り「絶対的な主観性による主観性の超克」をここに見る。また山本昭宏は本作品で大江が「隣にいる他者たちや、過去(たとえば先祖や共同体の「御霊」と未来(たとえば子どもや「新しい人」)の他者たちと溶け合うこと)によって、自分がその共同体に在ることの意味を受容する可能性を描こうとした」とし、「それ

こそが「懐かしい」の意味ではないか」と評した。<sup>4</sup>しかしこれらが、「魂の救済」を言わば現実逃避とする中村の批判を克服し切れていないのも事実だろう。例えば黒古一夫は本作品について「現代社会に對する否定的な思考が大江に強く（ユートピア）を志向させた、とも言える。もつとも、それは自身の小説に登場する幻想の（森や）谷間の村」を通して、また現実世界への深い絶望を反映して（魂の救済）（「人生の親戚」）を願って、であるが……」とためらいがちに述べていた。<sup>6</sup>また「懐かしい年への手紙」発表直後には「大江健三郎のこの物語は、文学作品でありながらすでに宗教と境界線を往還している。これは、大江健三郎のまったく新境地を開いた作品といえないのである」<sup>7</sup>とその宗教性を高く評価していた栗坪良樹も、「燃え上がる緑の樹」に対しては「（個人的）な（魂のこと）に執着してしまったとしか読みようがない。（魂の救済）という大命題を、個人的のことにしてしまえば、イワシの頭も信心からといった狭い話になりかねない」と批判している。栗坪のこの評価の推移は、「魂の救済」の客観性の証明が一般に難しいことを示唆しているよう。そのことは、「煉獄のモデル」を作ろうとする「ギー兄さん」は、その世界モデルを公共化できない」として、社会的軋轢を生む人造湖造成を通じた（魂の救済）の公共性の欠如を問題視する井口時男の批判につながる。結局本作品は大江の主観的な思い込みとしての（魂の救済）を描いたに過ぎないのだろうか。

しかし荒木奈美は近年、「ギー兄さんは、自身の生き方をもって、本当の自己語りに必要なのは、物語が破綻するほどに、自己の「内面」を描きだし、自身の負の感情をもふくめたところから自己を見

つめ直すこととということを伝えていたのではなかったか。実際にギー兄さんはそれ実感として気づき、「人造湖」という新しいモデルを作り、今度は自己の限界を越えたものとしての（物語）が漏れ出るような、新たなモデルを「僕」の前に見せたのではなかったか」と指摘した。<sup>11</sup>これは作品の焦点を、大団円における（魂の救済）から、そこを漏れ出るところの、自分が人造湖を決壊させ鉄砲水とともに小舟に乗って突き出す夢としてギー兄さんが生前最後に語った「愛とはまさに逆の」「世界じゅうのあらゆる人びとへの批評」となる彼の「負の感情」にずらすものである。そこに、主観性を越えた（魂の救済）の社会的意義を見いだせるのではないか。だとするなら、ギー兄さんのこの「負の感情」に積極的な意義を見いだす作品の原理と、本作品の持つ社会的意義を明らかにすることが課題となろう。

その際まず押さえるべきは、本作品における「回心」の概念を「煉獄」との相関において捉え直すことである。中村論は「懐かしい年への手紙」における「回心」を宗教的な意味とともに「思想的・政治的転向をも意味する語である」と規定し、「大江は最近のエッセイ『最後の小説』（「新潮」一月号）<sup>12</sup>では中野重治の小説『村の家』の「転向」問題を、アウグスチヌスの『吉日』（注：『告白』の間違いか）やダンテの『神曲』における宗教的回心問題と重ね合わせて考察している」と指摘していた。中村はここで「回心」を明らかに変節の意味で捉えているが、大江が『最後の小説』で論じているのは、『村の家』の主人公の「今後のかれの生き方の上で正への一段階としてすえなおすことができるような」「転向」であり、長い苦悩の果てに得心されたアウグスチヌスの「回心」であり、「生の転倒した価値を

打ち壊す、そして死を正統的な生に作りかえる」「真実への旅」としての「地獄への降下」を経て煉獄に到達し真の（魂の救済）へと導かれる「神曲」の「回心」である。それは、挫折に至る過程に対する真摯な反省を踏まえて理想実現の志を新たにすることの（再生）としての「回心」であり、これを経て本作品大団円の「煉獄」のビジョンが導かれ、そこに至る地獄めぐりの過程で蓄積されたギー兄さんの「負の感情」にも「批評」としての公共性が担保されると考えられる。この展望の下に本作品を分析することで、中村が「根拠地運動」を挫折させるには「誠実な方法とはいえない」「偶然の不幸」と批判したギー兄さんの強姦殺人の意味も明らかになるだろう。

## 2 作品の原理 ——（煉獄の寛容）——

まず本作品の原理だが、それは（煉獄の寛容）としてまとめることができる。大江は二〇〇六年六月から一二月にかけての七回の連続講演の六回目「ダンテと『懐かしい年』」で『懐かしい年への手紙』制作に関して「私が煉獄という場所の、西欧文明での特別さについて教わったのは、ジャック・ル・ゴッフというフランスの歴史家の『煉獄の誕生』（渡辺香根夫他訳）をつうじてでした」と証言し、「もともとキリスト教の世界には、天国と地獄しかなかったらしい。天国に、救われた魂がいる、地獄に救われない魂がいる。地獄の魂は絶対救われない」が、「中世の人たちが、『第三の場所』としての煉獄を発見」し、後にプロテスタントからは批判されるものの「民衆に大歓迎された。そして、ル・ゴッフは、煉獄が誕生して百年と少しで、

ダンテという詩的天才が現われ、見事にそれを描いてもらったことは幸運だった、とも書いています」と述べた上で、「煉獄の島の低いところは、これから煉獄の山を登って自分を浄める旅を続けて行く者らが、その苦行に入る前の準備的なことをする場所です。また山を登ることで修業を重ねていく魂たちには、生きている者の世界に残した家族や、友人知人たちが、あの人が救われますようにと祈ってくれる必要もあるようです。あの人を救ってくださいと神に祈ることをしてくれと、それに自分の努力が重なってついには天国に昇りつくことができる……」と煉獄について解説する。実際『神曲』「煉獄篇」第一一歌でも、煉獄で修行を積む死者たちが生者たちの平安を願い祈りを捧げており、それを見たダンテが「もし煉獄の人がこうして私らのために祈ってくれるのなら、／現世の善根の人々はこの地からつけていった汚点を洗い落とし、／魂が清らかに軽やかになつて星の輝く天球へ／飛び立てるよう手をかすべきではないのだろうか？」（平川祐弘訳）と述べている。ここから、ル・ゴッフ『煉獄の誕生』に学んだ、死者と生者が互いの救済と平安を祈り合う（祈りの共同体）としての『神曲』の煉獄のイメージが、「懐かしい年への手紙」の重要なモチーフになっていると見られる。『煉獄の誕生』は一九八八年六月に法政大学出版社から渡辺香根夫・内田洋訳で邦訳が出るが、原著はパリのガリマール書店から一九八一年に、英訳版がシカゴ大学出版局から一九八四年に出ている。大江は原著もしくは英訳版を『懐かしい年への手紙』執筆に先立ち参照したと見てよいだろう。

さらに大江はこの講演の五回目で「面白い」「それに私は根本的にとっていいほど強い影響を受けました」と述べていたJohn Frecceroの「Dante: The Poetics of Conversion」にこの六回目の講演で改めて言及する。「ダンテ 回心の詩学」と訳せるこのフレッチェーロの著作は、ハーバード大学出版局から一九八六年に出ていて邦訳はないが、大江がこれを原書で読んだことは講演の文脈から明らかだ。大江はこの著作でフレッチェーロが、自力で煉獄に到達し救われようとして地獄に落ちたユリシーズ（オデュッセウス、ウリッセ）が登場する『神曲』『地獄篇』第二六歌に触れていることについて、それまで古代の循環する時間にいる叙事詩的なヒーローだったユリシーズが「循環する立場に安住しているのは嫌だと、キリスト教的な終末観の、つまり歴史の中に飛び込む。そうやって小説の最初の人物となる。それが、ダンテのもたらした、叙事詩から小説への大転換だ、とフレッチェーロはいうのです」と述べる。また「懐かしい年への手紙」でも『神曲』におけるユリシーズを論じたフレッチェーロの論文「Dante's Ulysses: From Epic to Novel」が登場し、その抜き刷りをW先生からもらっていた「僕」が服役中のギー兄さん（ユリシーズ）にこれを差し入れたところ、「人がよく死と再生を経験しうる時にのみ、かれはこのような探検の旅から本当に帰ることが出来るのだ。……ここで私があきらかにしたいのは、ユリシーズの悲劇的な死は、それを補完するものとして、ダンテの主人公の生存を待つと感じられるということである」という箇所が引かれて返送されてくるエピソードがある（第三部第一章。フレッチェーロの論文を手がかりに、ギー兄さんが自分を地獄に落ちたユリシーズになぞらえ、自

させ小舟で鉄砲水に乗って下流に押し出す自分の姿を夢に見て、これを「愛とはまさに逆の」「世界じゅうのあらゆる人びとへの批評」としての「自分の生涯の実体」だと感じる（第三部第四・最終章）。こうして自力救済を捨て自ら進んで地獄へ行くかのように破滅へ向かったギー兄さんに、「僕」は回心の奥義に従って救いの手を延べ、「懐かしい年」という想像の煉獄に彼を再生させるのである。ここでギー兄さんは、循環する古代の共同体から脱出し、自力で煉獄に到達せんとして地獄に落ちた『神曲』のユリシーズに重ねられているわけで、このユリシーズ像に古代的な「叙事詩」から近代的な「小説」への転換を見るフレッチェーロの見解に、大江は注目していた。つまりユリシーズはここで、古代の循環からもキリスト教の神の導きからも逸脱して地獄に落ちることで人間の新たな自由と可能性を切り開く、近代的英雄の象徴なのである。そのようなユリシーズのごとく「根拠地運動」に挑んで挫折し地獄へ赴くギー兄さんと、現世に生還してユリシーズを書き留めるダンテよろしくギー兄さんを想像の煉獄「懐かしい年」に再生させる作家「僕」との関係には、循環する時の中にある伝統的共同体の安寧を打破して新たな可能性を開こうとする近代精神と、地獄行きに帰結した近代精神を記憶し再生すること（ユリシーズ）で新たに活性化し持続する伝統的共同体（ここでこれは「僕」が都市生活者である点で亡命政府的だが）との共存というビジョンを見取ることができよう。

この「自分の生涯の実体」に正直な者に積極的意義を見だし再生・復権させる共同体としての煉獄というアイデアの背景には、フレッチェーロの論文を「僕」に手渡したW先生、すなわち大江の恩

己の罪の浄化・救済について考えていることが示唆される場面である。そして出所後ギー兄さんは「僕」の小説『万延元年のフットボール』の事故とも殺人ともとれる形で村娘が死ぬエピソードに自分の強姦殺人をなぞらえて自己弁護を図るが、これに対し「僕」の妻ユースンから「けれども私は、この娘さんの側から、考えずにはいられないわ。事故であれ殺人であれ、ともかく酷たらしい死に方で死ななければならなかった、と……」と根本的な批判を受ける（第三部第一章）。この体験後、放浪の旅の途中で東京の「僕」を訪ねたギー兄さんは、出所後初めて買った本が『神曲』をひたすら回心の物語として読みとる「フレッチェーロの著作だったことを告白し、救済を求め自力で煉獄山に登ろうとして失敗した『神曲』におけるダンテがウエルギリウスの導きで改めて地獄をめぐる煉獄から天国に至る意義を説くこの著書から「死と再生を経ての、回心の達成」を学んだ旨を述べるのである（第三部第二章）。このフレッチェーロの著作とは大江の証言とそのタイトル及びギー兄さんの述べる内容から「ダンテ 回心の詩学」と想定されるが、このギー兄さんのフレッチェーロ精説は、ユリシーズのような自力救済を自論む自分が死んで、ダンテのように一度地獄に落ち切ることによって煉獄に再生する道が開かれること、すなわち自力救済を断念して罪人としての己を他者に全面的に開示する根本的な回心に至ること、はじめて他者からの救いの手が差し伸べられ、そこから煉獄という救済の共同体が立ち上がってくることを、彼に悟らせたのだと言える。

このように回心の奥義を悟ったギー兄さんは、自分の欲望に忠実に、人々の反感を買う人造湖建設を開始する。そして、堰堤を決壊師であるルネサンス研究者・渡辺一夫の「寛容」の思想があるだろう。「懐かしい年への手紙」第一部第三章では、「僕」がW先生の一周忌の日にメキシコの大学で「寛容の問題——日本のフランス文学者をめぐって」と題する講義をしたことにもなっており、渡辺の「寛容」が大江のダンテ受容の基盤になっていることをうかがわせる。渡辺は、秩序を乱す者の中に既成秩序の欠陥についての批評を見るべきだという「寛容」を説く。そこからすれば「懐かしい年への手紙」は、渡辺一夫W先生をウエルギリウスの導師として、「根拠地運動」及びギー兄さんの人生における最大の蹉跌となった強姦殺人の原因を見極め、その批評的意味を掘り起こす小説だと言える。第二部第十一章の終わりでセイさんが「僕（Kちゃん）」に「ギー兄さんがどうしてああいうことをしてしまわれたのか。それが私にも納得のいくような小説ができたならばな、雑誌を一冊送ってくださいや。それを読んでみたいと思うから」「Kちゃんが一所懸命に小説を書くのであれば、それでギー兄さんの今度のこと、なにかわかつてくるはずやと思いますか！」と述べるのは、まさに本作品こそ当の小説であることを示すメタフィクションなのである。

### 3 〈統後〉としての〈戦後日本〉

それではギー兄さんの強姦殺人はなぜ起き、それはいかなる批評的意味を持つのか。先ず注目されるのは、「僕」が敗戦直後の小学生時代を回想する第二部第二章である。ここでは、この章で語られる出来事によって「ギー兄さんが突然かちえた幻影がらみの名声が、

考えてみれば十五年の余も生き延びて、根拠地の運動を可能にしたのだともいえないと思う」と「僕」が述べており、「根拠地運動」の帰結であるギー兄さんの強姦殺人の大元の原因がこの章にあると考えられるのである。この前の第二部第一章では、敗戦の日の晩、ギー兄さんが自分の屋敷でセイさんを助手として、村中から集まった女性たちに向け彼女らの出征した夫や息子の消息を占う「千里眼」を実施する。これは村の伝統的な権威であったギー兄さんに女性たちが自ら依頼したものであった。このことは、敗戦が決まった段階で村が「戦地」と「銃後」に決定的に分裂し、イエ制度の存在によって男性の庇護無しでは生きられぬ（銃後）の女性たちが、帰ってくる当てのない（戦地）の男性をギー兄さんの伝統的権威に依拠して切り捨て、新たな男性「イエの庇護を獲得して戦後を生き延びよう」としたことを意味する。しかし第二部第二章で出征兵士が戻ってくると、この「千里眼」がでたらめだったことが判明し、「千里眼」で戦死を宣告されたため妻が自分の弟と再婚してしまった男を先頭に立てて帰還兵の「青年団」がギー兄さんの屋敷に押しかけ、衆人環視の下でセイさんとギー兄さんにキウリを使った性行為を強要する事態となる。この性暴力が暗い噂として村に広まることでギー兄さんの権威は失墜し、彼を司祭とした（銃後）共同体は瓦解して、村は「青年団」の隠然たる暴力支配の下に置かれる。性管理システムでもある共同体を破壊する性暴力は、（戦地）暴力の典型と言える<sup>17</sup>。

しかしギー兄さんは自分の受けた性暴力を「若い男女が、つまりぬ性的禁圧から自由になった」性の解放の契機として合理化し、「子供の時から世話になってきた」セイさんと母子相済的な関係に入る。

ここでギー兄さんは自己の受けた（戦地）暴力の屈辱を積極的なものに転化し正当化するためセイさんを犠牲にしているが、その事実をセイさんの同意に依拠して抑圧・隠蔽することで、セイさんと（戦地）暴力を暗に容認する共犯関係に入るのである。こうしてギー兄さんの屋敷は一見「性的な祭・饗宴」（第二部第五章）の展開する解放区という進歩的・民主的様相を呈しながら、事実としては（戦地）暴力的な性のアナキーが跋扈する（地獄）と化し、後にセイさんと「僕」及びギー兄さんとその元恋人たちによる乱交状態が展開すること（第二部第五・六章）の伏線となる。

一方、「青年団」による陵辱の一件があったから間もなく進駐軍が村にやってくる。村で唯一英語が使えた旧制中学生のギー兄さんは米兵に見事に対応し、一躍村の英雄となる。これが、後の「根拠地運動」につながる。「僕」が述べた出来事である。

その翌年の秋祭りで、「青年団」の扮する大きな獅子舞・牛鬼がギー兄さんの屋敷を襲うが、日本刀を持ったギー兄さんを前にして退却する事件が起こる。これを目撃した「僕」は、村の伝説的な創建者である「壊す人」の魂が森から降りてきてギー兄さんに憑依し「青年団」を圧倒したと思う。「僕」にとつてこれはギー兄さんが伝統的権威を回復し、その威光で（戦地）暴力を撃退して（銃後）共同体を復活させた出来事なのである。しかし客観的に見ればギー兄さんのこの時の権威はかつてのような村の伝統に依拠するものではなく、アメリカと渡り合える英語力、ひいては自分が渡り合うアメリカの威光に基づくものと言わねばならない。村と進駐軍とのパイプ役であるギー兄さんは「青年団」にとつても重要な存在で、日本刀を持つ

たギー兄さんに斬られぬよう集団で襲いかかり致命傷を負わせるわけには行かず退却したのだ。村の大人たちが進駐軍の目を恐れ銃剣類を慌てて森のきわに埋めたのにギー兄さんが日本刀を自宅に置き続けたのも、それについて進駐軍を英語で説得する自信があつてのことだろう。しかし牛鬼（撃退）を目撃した「僕」は、「壊す人」の魂が森に埋められた日本刀を持ってきてギー兄さんに与えたと考えるのである。

さらに「僕」はその後かなり年月が経って妹のアサに間違いを指摘されるまで、牛鬼の一件の後で進駐軍へのギー兄さんの見事な対応があつたと、時系列を入れ替えて記憶してもいた。「僕」はあくまでギー兄さんが、「青年団」の（戦地）暴力によって失った伝統的権威を自ら回復して「青年団」を撃退し、（銃後）共同体を復活させ、これをアメリカに承認させて盤石のものにしたと考えたいのである<sup>18</sup>。

これはギー兄さんにとつても望ましい（史観）であろう。しかしこの（史観）は、ギー兄さんの屋敷で性暴力が「性的な祭・饗宴」とされる欺瞞と同じく、一見非暴力的な（銃後）共同体が実は（戦地）的な暴力を抑圧・隠蔽しつつ温存している事実を直視しない危うさを持つ。そのことは、新制中学の民主的な活動に加えられる陰湿な嫌がらせや、校内にはびこる番長の暴力支配となれ合う新制高校の教員たち（以上同第三章）、エリート進学校におけるスクール・カースト（同第四章）など、民主的であるはずの組織・集団が閉鎖的な共犯関係の共同体を形成して（戦地）的な暴力の温床となる（戦後日本）社会と相似形をなすのである。

#### 4 〈戦後日本〉の死

そして、アメリカの占領が日本の非武装化を目的としている間はリアリティを持つていた「僕」の（史観）は、冷戦の激化によりアメリカが日本の反共基地化を目論んで日本の（戦地）勢力と手を組むようになると色あせてくる。現に高校生になった「僕」には、朝鮮戦争に徴兵される恐れや母子家庭の優等生として保安大学校受験を強要されるなど、（戦地）の脅威が迫る。従って「僕」が将来ギー兄さんと共同で村の歴史の編纂を行うのに必要な語学を修得するため東大文学部入学を目指し、ギー兄さんの指導で受験勉強に取り組むことは、アメリカと日本（戦地）勢力同盟に対抗して自らの（史観）を現実化すべく、土着の伝統的権威に基づいた（平和と民主主義）を実践する（銃後）共同体としての（戦後日本）を建設し確立するための第一歩なのである。これは後のギー兄さんの「根拠地運動」と軌を一にする。さらに「僕」が小説「奇妙な仕事」で学生作家としてデビューすることもその延長線上にある。それは、現実の大江が「ほくら日本の若い人間たち」には「真に人間的な連帯はなく」「ただ体をからませあっているだけだ」というイメージを想起したことから「奇妙な仕事」を執筆した事実<sup>19</sup>に対応する。すなわち、（銃後）共同体の構成員としての（戦後日本）人による「真に人間的な連帯」こそ、二人が暗に目指すものなのだ。

それ故、アメリカをバックとした（戦地）勢力の暴力の発動である右翼の安保デモ襲撃によって「頭蓋骨を割られ舗道に血を流しながら横たわって」「この広い東京でまったく孤立無援だと感じた」

ギー兄さんが、「自分のように横のつながりも・縦のつながりもない者が、個として実効性のある力をたくわえ」るために必要で、「自分より他の、やはり個としての力をたくわえよう」としている者ら」にも「役にたつる」拠点として「根拠地」建設を着想する（第二部第九章）のは、自然である。実際それは、日米安保体制下で日本人の企業戦士化と都市化を進める「所得倍増計画」<sup>20</sup>に対抗した、〈平和と民主主義〉の精神に基づく農村共同体の振興運動としての相貌を次第に鮮明にしていく。この「根拠地運動」はもともとギー兄さんと繁さんとの恋愛から立ち上がってきており、そのことは暴力的な〈戦地〉勢力に抗する〈銃後〉＝〈戦後日本〉的な愛と平和の精神を象徴するものとも見える。

しかしその裏では、ギー兄さんが自身の〈戦地〉暴力を合理化するセイさんとの関係が続いているのである。そしてギー兄さんのこの二股をタブーとする共犯関係が運動組織の中で生じてくる。「僕」と婚約中のオユースアンを侮辱した村の若い衆を懲らしめる（第一部第二章）など有能な工作員であるアサ（「僕」の妹）は、東京からギー兄さんと村にやってきて屋敷に住み込むことになった繁さんを「村中に自然なものとして認めさせる」ため、「屋敷にやって来る若い衆らを有効に利用して、村の噂話を制禦」する。一方でアサは「ギー兄さんと性関係があるというようなことは、大騒ぎするほどの問題ではないと、繁さんにもセイさんにも印象づけ」、「それでも心理上のこまごました行きちがいは生じたようだが、繁さんもセイさんも妹をなかだちにそこをいちいち解決して、オセツチャンをふくめた屋敷の女たちの根拠地への協力態勢は揺るがな」いようにする（第

根拠地は昔からの友達のために作っているんだとしたら、それはずいぶんエゴセントリックじゃないですか？」と、組織の腐敗を正當にも糾弾する。だがこれはギー兄さんの暴力によって潰されてしまふのである（第二部第十章）。

そして繁さんは、自分の演劇を重視しなくなり、セイさんとの関係を続けながらいつまでも自分と正式に結婚しようとしないうギー兄さんを見限って村を去ろうとするが、その当然の行為はギー兄さんの権力の源泉たる〈神聖なる〉二股関係を破壊するため、彼はこれを容認できない。ギー兄さんは人間の尊厳を破壊する性暴力で繁さんを自分に隷属させようとし、抵抗されたため殺してしまう。そこで否応なく露呈する己の暴力性をなおも隠蔽しようと、彼は〈戦地〉暴力の被害者としての自分を再現すべくキウリを肛門に突っ込み、安保デモでの流血のように頭を真っ赤に塗って、加害者としての自分を抹殺するため自殺を図るが、失敗する。彼の権威は再び失墜し、運動は瓦解する（第二部第十一章）。それは、ギー兄さんと「僕」が夢見た理想の〈戦後日本〉が、〈平和と民主主義〉を標榜しながら〈戦地〉暴力を温存し続ける己の加害性を清算し得ていない矛盾を露呈して、一旦死んだことを意味する。

## 5 結論 —— 〈戦後日本〉再生への志 ——

この「根拠地運動」の顛末が示唆するのは、〈戦後民主主義〉的なものが〈戦地〉をタブーとして排除し抑圧する共犯関係という閉鎖的な〈銃後〉共同体の原理としてあり、己の内なる〈戦地〉に無

## 二部第九章）。

やがてギー兄さんは信奉者の若い衆に囲まれる「神秘主義のグルーブの指導者のよう」になり、そこにアサは「屋敷の家系に、その能力の血があるということ」で「戦争中にはこの地方で頼りにされた」千里眼「だった」頃の彼の面影を見る。ただ運動のリーダーとしてのギー兄さんの権威は、アサが想起するような村の伝統に依拠するものというよりも、この場合は主としてギー兄さんの二股をタブーとする組織内の共犯関係に依拠するものである。そして、本来あらゆる「個」に「根拠地」として開かれているはずの組織は、当のタブーを権力の源泉とするギー兄さんにどれだけ近い関係にあるかを基準としてメンバーが序列化されるという、閉鎖的な共同体としての様相を呈するようになっていく。すなわち、運動を視察に来てでも大した働きもせず、節制するメンバーを尻目に毎晩深酒するばかりの「僕」をギー兄さんは優遇し、村で上演する演劇の台本作者に取り立てようとする。そして運動の中では、第二部第十章の屋敷での夕食会に顔をそろえるギー兄さんとセイさんにオセツチャン、「僕」とその妻オユースアン及び繁さんの「ギー兄さんの家のメンバー」以外のメンバーは「若い衆」と一括りにされ、一向に顔の見える存在になつてこない。唯一の例外が、東京の大学の演劇科学生としての専門性から女優の繁さんにアクセスする徳田君である。彼はこの夕食会の後の酒宴で「ギー兄さんは事実上、繁さんと夫婦関係を結んでいるわけですが、セイさんも戦争中から夫婦同様だったというし（中略）そのうちオセツチャンが娘になるのを待っているとも、噂している連中はいますよ。……そういう具合に屋敷はハイレム化させて、一方、

自覚で無力であると同時に、〈戦地〉をも含む外部・他者に対して公平に開かれていない、排他的で非民主的な暴力性を孕んでいたという事実である。この後ギー兄さんは、逃れようなく〈戦地〉暴力に連なる主体となった自分の救済の可能性を本格的に「神曲」の中に探った結果、自力救済の可能性を受け入れる「寛容」を獲得することで救済への道が開けるという、回心の逆説を悟る。そして、自ら破滅に赴き地獄に落ちることによって、生き残った「僕」の想像の内で「懐かしい年」という煉獄の岸辺に到達し、循環する時の中で繰り返し再生することを得るのである。

罪の浄化を目指してたどる煉獄山の険しい道のりを前途に控え、しばし麓の岸辺に憩うギー兄さんに、「僕」はこれから幾たびも手紙を書こうとする。それは、ギー兄さんの救済を願う祈りであるとともに、失敗した「根拠地運動」が永久革命として新しく甦ることへの祈りである。その祈りによって、誰もが〈戦地〉とその暴力を我が身に引き受け、己が罪を浄化すべく力を合わせ、排除と暴力の連鎖を愛の呼応に転化して世界平和の輪を広げるといふ、「寛容」の思想に基づく民主的で開かれた煉獄共同体としての〈戦後日本〉再生の展望が開けてくるのである。ギー兄さんの生涯は、そのような理想の戦後日本を未だ実現し得ていないこの世界への「批評」として「僕」に抱きとめられ、〈魂の救済〉が実現する世界がいかなるものであるのかを、私たちに教えるのだ。

このように、地獄から生還してユリシーズの悲劇的な死を補完するダンテという「神曲」の図式を踏襲する「懐かしい年への手紙」は、〈戦後日本〉という〈地獄〉をめぐる、その実態を見極め浄化し救済

せんとするいわば現代の『神曲』であり、ラディカルな批判を通じて〈戦後民主主義〉の再生を目指す、大江の持続する志が込められた作品と言えよう。

注

- (1) 『朝日新聞』一九九四年二月三日夕刊掲載。
- (2) 主に平川祐弘訳の河出文庫版(二〇〇八年一月〜〇九年四月刊)を参照。
- (3) 『大江健三郎の八〇年代』一九九五年二月、彩流社刊。二七二〜二七四頁。
- (4) 『大江健三郎とその時代』二〇一九年九月、人文書院刊。二六五頁。
- (5) 『新潮』一九八九年三月号及び『文学界』同三月号、同四月新潮社刊。
- (6) 『作家案内——大江健三郎』(講談社文芸文庫版『懐かしい年への手紙』所収。一九九二年一〇月)
- (7) 『世界の果て・人類総体からの〈啓示〉——新作「懐かしい年への手紙」——』(『文学時評』第一四号、一九八七年二月一〇日)
- (8) 第一部『救い主』が殴られるまで』(『新潮』一九九三年九月号。同年一月、新潮社刊)。第二部『揺れ動く』(『新潮』九四年六月号。同年八月、新潮社刊)。第三部『大いなる日に』(『新潮』九五年三月号。同年三月、新潮社刊)。
- (9) 『大江健三郎の肖像——またはその発言をめぐる光景』(『國文

果して永劫に正義の側に属し得るものかどうかということを深く考え、秩序を紊す人々のなかには、既成秩序の欠陥を人一倍深く感じたり、その欠陥の犠牲に自らなつて苦しんでいる人々がいることを、明らかに弁える義務を有する」とある。この言葉が、宗教改革の不寛容に抗したエラスムスやカステリヨンに造詣の深いルネサンス研究者・渡辺の学識に裏打ちされたものであることは言うまでもない。本論文は『世界』主要論文選(一九九五年一〇月、岩波書店刊。引用はこれによる)にも収録された、戦後日本論壇を代表する論文である。

(17) 性暴力が共同体を破壊し、暴力渦巻く自然状態(「地獄」)を招来するという観念は、杉山春『児童虐待から考える』(朝日新書。二〇一七年一二月、朝日新聞出版刊)に想を得た。本書第三章「国家と家族のあいだで」において杉山は、満州引き上げの際の性暴力をルポした経験に基づき考察を展開し、「誰にも支配されない空間が生まれる時、激しい性暴力が起きる」と述べている。また同章には「社会制度が壊れた時、若い女性たちにとって、性は生き延びるための手段になる」という指摘もある。これは、敗戦の晩に村中の女性たちがギー兄さんの屋敷に集まり「千里眼」を要請したこと、またセイさんがギー兄さんとの性交渉に同意して、「戦地」的な性暴力の行使を容認し隠蔽するギー兄さんとの共犯関係を積極的に荷担していくことこの理由を示唆するものであろう。

(18) 小森陽一『歴史認識と小説——大江健三郎論』(二〇〇二年六月、講談社刊)第四章にも、「僕」のこの記憶違いについて言

学 解釈と教材の研究』一九九七年二月臨時増刊号)

(10) 『危機と闘争 大江健三郎と中上健次』二〇〇四年二月、作品社刊。二〇四頁。

(11) 『大江健三郎「懐かしい年への手紙」論——ポール・リクール「物語的自己同一性」を手がかりとして——』(『札幌大学総合論叢』第三五号、二〇一三年三月)

(12) 『一九八八年。「最後の小説」は単行本「最後の小説」(一九八八年五月、講談社刊)所収。

(13) 『すばる』二〇〇七年二月号。『読む人間』(〇七年七月、集英社刊。二〇一一年九月、集英社文庫)所収。本稿では集英社文庫版所収のものを参照した。

(14) 『本のなかの「懐かしい年」』(「すばる」二〇〇七年一月号。前掲(注13)『読む人間』所収)

(15) 『懐かしい年への手紙』上梓直後に発表された『最後の小説』(注12)でも大江は「(『Dante—the poetics of conversion』、ハーヴァード刊)としてこのフレッチェーロの著作に言及しており、大江がこれをギー兄さんの思想形成の上で活かしていることは明らかである。前掲中村論も『最後の小説』を引きつつ、フレッチェーロが「懐かしい年への手紙」でギー兄さんの『神曲』解釈に引用されていることを指摘している。

(16) 『寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか』(『世界』一九九一年九月号)に、「既成秩序の維持に当る人々、既存秩序から安寧と福祉とを与えられている人々は、その秩序を紊す人々に制裁を加える権利を持つとともに、自らの秩序が

及がある。ここでは並行して、「征服者」の常套手段としての性暴力や「根拠地運動」と右翼との親和性、安保闘争における暴力肯定など、重要な指摘がなされる。だがこの小森論文では、『同時代ゲーム』(書き下ろし。一九七九年一月、新潮社刊)など他の大江作品との関係を重視する関係上、ここでの実際の出来事が、進駐軍へのギー兄さんの対応、「青年団」によるギー兄さん陵辱、ギー兄さんの牛鬼(撃退)、の順で起きた可能性もあるとやや苦しい想定がなされるなど、論旨と分析が今ひとつ明瞭でない。しかし、「僕」が誤って記憶する時系列の中に、一旦「青年団」から受けた性暴力の屈辱を「青年団」の牛鬼の「撃退」でギー兄さんが晴らし、その上で村の代表者として進駐軍と渡り合い「復員者」の「暴力」も抑制したとする因果関係を見る指摘は本論と見解を同じくする。ただ小森論ではそのことの戦後史的意味には言及がない。

(19) 『徒弟修行中の作家』(『朝日新聞』一九五八年二月二日。『厳粛な綱渡り』(一九六五年三月、文藝春秋新社刊)所収)

(20) 宮本憲一『昭和の歴史 第一〇巻 経済大國』(一九八三年七月、小学館刊)三五〇頁には「モレッツ社員 自衛隊に一日入隊し、心身を鍛えられる民間企業労働者。『月火水木金』の現代版?」との説明が付された、隊列を組んで駆け足する男性たちの写真が掲げられており、高度成長期日本企業の軍隊的性格を窺わせる。